

(2018年7月26日講演)

4. 長期停滞と資本主義の行方

早稲田大学大学院アジア太平洋研究科長 浦田秀次郎委員

今日はリチャード・ボールドウィンが書いた『世界経済大いなる収斂』という、かなり分厚い本の紹介・説明をするということで、何か寺西ゼミの中での報告のような感じであるが、よろしく願います。レジュメには、文章が最初で、後のほうにこの本からコピー&ペーストしたような図を全部張り付けた。それだけではなく、幾つか私が改めて作った、あるいは持ってきた図も追加している。スクリーンには図を映しだして話をしようと思うので、文章のほうはレジュメをご覧になってもらえればありがたい。序章から始まって、I部からIV部まで10章ある。

序章でこの本のポイントが示されているわけであるが、この本の目的は、グローバリゼーションの歴史を分析するということである。グローバリゼーションに関して言うと、1990年を境に、それ以前のグローバリゼーション、もう少し具体的に言うと1820年ごろから1990年までのグローバリゼーションをオールド・グローバリゼーションと呼んでいるが、そのグローバリゼーションと、1990年以降のグローバリゼーション、ニュー・グローバリゼーションでは、いろいろな性格あるいは影響等、大きく異なっているというのが一つポイントだと思う。図を使いながら説明しているが(P10)、オールド・グローバリゼーションは、1820年から1990年ごろまでであるが、その間における世界各国の所得分布が大きく変化した。1820年から1990年まではG7工業先進7カ国であるが、その7カ国の世界の所得に占めるシェアが大きく拡大したことが、ご覧になってもらえば分かるとおりで

る。ちなみにG7とか、後でほかのグループ、ほかの国の分類が出てくるのだが、それを8ページの下のところ示しておいた。G7は言うまでもなくアメリカ、日本、ドイツ、フランス、イタリア、イギリス、カナダの7カ国である。この7カ国の所得が世界に占める割合が急上昇したのが1990年代ぐらいまで。1990年以降、急激にこれが低下しているということで、これがニュー・グローバリゼーションである。

「アンバンドリング」という言葉がよく出てくる。これは後で説明したいと思うが、1820年つまりグローバリゼーションの始まる前においては、消費と生産が結びついていたと、それを「バンドリング」と呼んでいる。この生産と消費が分離していく状況を「アンバンドリング」と呼んでいるが、オールド・グローバリゼーション1990年以前のグローバリゼーションは第1のアンバンドリングで説明できるのではないか。それから、1990年以降のニュー・グローバリゼーションについては第2のアンバンドリングという形で説明できる

だろうというのが、ここでの重要なポイントだと思う。

グローバルゼーションを推進する 3 つの重要な要素ということで、モノの移動、アイデアの移動、ヒトの移動とあるわけであるが、第 1 のアンバンドリングはモノの移動に関するもの、第 2 のアンバンドリングはアイデアの移動に関するものが重要な要素である。第 3 のアンバンドリングは、今まさに進められていると思われるアンバンドリングであるが、ヒトが重要な要素となっているということである。

先ほど申したように、この本の目的は、今話した 3 つの要素に着目することでグローバルゼーションの進展および背後にある要因を明らかにするとともに、経済への影響を分析し、先進諸国および途上国における経済発展政策を考える上においての重要な含意を提供するということである。

第 I から第 IV 部までであるが、第 I 部は、グローバルゼーションの長い歴史という観点から見る。第 II 部は、2 ページになるが、グローバルゼーションのナラティブを拡張するということが、グローバルゼーションにある背景になる要素などを分析していくということである。第 III 部が 4 ページで、何が新しいグローバルゼーションの要素なのかということによってグローバルゼーションの変化を読み解く。第 IV 部が 7 ページで、未来を見据えるということによってグローバルゼーションの将来を考えるという構成になっている。

第 I 部のところでは、図 1 と図 2 があるが、図 1 では世界の所得に占める G7 のシェアが上昇しているのに対して、図 2 では G7 の世界の所得に占めるシェアが低下していく一方で、I6 のシェアが上昇している傾向が読み取れる。I6 は、新興工業経済 6 地域ということで、中国、韓国、インド、インドネシア、タイ、ポーランド、この 6 つの国をまとめているわけであるが、確かに中国、韓国、タイなどは我々も急速に拡大している国だと理解しているわけであるが、インドも最近そうだと思うが、インドネシア、ポーランドなどは本当にこのグループに入れてよいのか、私もこういう分析を慶應の木村福成氏とやるのだが、インドネシアはここに入るのかなと言いつつやっているので、その辺の分類は必ずしもすべての人が合意することはないかもしれない。いずれにしろ、I6 のシェアが急拡大しているというのは、このとおりである。

それから、グローバルゼーション以前、これはまた子供向けの絵本の中から取ってきたような図 (P11) であるが、バンドリングという状況は生産と消費が同じ場所で行われている、それが分離されていくのがアンバンドリングで、グローバルゼーションが進んでいくということである。これが第一のアンバンドリング。輸送コストが大きく低下して貿易が拡大する。第二のアンバンドリングは ICT 情報技術のコストが低下することによって情報が国境を移動するようになる。具体的には工場が各国に分散するという現象が起きだしているのが第二のアンバンドリングである。

第 I 部に戻るが、グローバルゼーションを 4 つのフェーズに分けている。フェーズ 1、2、3、4 とそこに書いてあるとおりであるが、グローバルゼーションはフェーズ 3 とフェーズ 4 である。それまでのフェーズ 1 とフェーズ 2 については、グローバルゼーション以前の状

況である。フェーズ1では人類が地球上に広く拡散するとか、紀元前20万年から1万年までの動きを、彼の分析というよりはほかの研究者の分析を引きながら説明している。人が狩猟民族のような形で獲物とか、木の実とか、そういうものがあるところに移動していったということである。フェーズ2になると、農業革命が起き、1カ所に定住し、そこで生産と消費が行われる。このフェーズ1、フェーズ2の時代は、実は図12、図15があるが(P12)、世界の所得分布で見ると、インド、中国等、アジアが非常に大きなシェアを占めている。

それから1820年、グローバリゼーション以前では、所得分布はやはりアジアが大きな位置を占めていた。ヨーロッパも少しシェアを拡大させていく。この時期は、ヨーロッパが台頭しだすルネッサンスとか大航海時代ということである。それが第1章フェーズ1、フェーズ2の説明である。第2章になってフェーズ3、第3章がフェーズ4という分析を行う。フェーズ3はローカル経済がグローバル化するということで、これは貿易が活発に行われるという状況である。これが第一のアンバンドリング、オールド・グローバリゼーションで、なぜこれが実現したかという、輸送技術のブレークスルーがあったからだ。具体的には蒸気革命等によって貿易コストが大きく低下し、そのことで貿易が行われるようになる。この時期には北、G7の国々で工業化が進展し、そういった国で造られた工業製品が世界に輸出されるようになると、モノは世界で消費されるようになり、こういう状況が生まれ出すわけである。

第一のアンバンドリング、フェーズ3というのは、国際貿易が行われる、つまりある国でモノが初めから終わりまで生産され、部品とかも含めてすべて1カ国で、生産が行われ輸出される。第二のアンバンドリングは、一つの製品を造るのにそれが各国間で工場が分散して行って、要は部品貿易を通じて1カ所で組み立てが行われるわけである。それが貿易されるという、工場がグローバル化するの、今まで一貫工場だったのが分離され、フラグメントされて、自動車の場合であれば、エンジンはフィリピンとか、エアコンは例えば日本とかという形でいろいろな国々で部品が生産され、それらがある国に集められて、最終製品(自動車)が組み立てられる。そういう状況が第二のアンバンドリングである。それを説明してしまうと、実はあまりほかに説明することがない。もしよろしければ、またこれに沿って説明したい。まずは貿易コストが下がってきたということは、頭では分かっている、数字を取ろうとすると難しいので、これは図17(P13)を見てもらっているが、1860年を100として、それ以降、貿易コストが下がってきたのがよく分かる。1820年から1990年までの話をしているわけであるが、それは何も問題なくずっとグローバリゼーションが進んだかということではなく、第一次大戦後、貿易が拡大していったという絵である。1930年以降、スムート・ホーリー法が通ってアメリカの関税が上がっていくと、保護主義が台頭してきた時期がある。そういう時期はもちろん貿易は抑制されていくわけであるが、ここで本から取ったのではなく、自分が集めたというか、よく使われる絵であるが(P14)、キンドルバーガーが作った世界の貿易量の額というか貿易量の月別の変化を表している。一番上が1929年の1月、2月、3月、4月、ここをずっと回って行って1930

年の1月にはこれだけ貿易量が減っていく。1931年にはこうやってクモの巣のような形で貿易量が減少していったという図である。この原因となるのは、関税、保護主義と為替切り下げ競争であるが、こういった世界の貿易の縮小が世界の生産の縮小をもたらし、第二次世界大戦の引き金になったというようなことも言われているわけである。これが1980年から1990年までに起きたことである。

第一のアンバンドリングがもたらした結果で、南北格差が拡大したということと、これがフェーズ3の第一幕、第二幕、第三幕と書いてあるが(図16、P15)、1990年まで、第二のアンバンドリングの時期であるが、黒塗りがA7。A7というのは古代文明7カ国ということで、中国、インド、パキスタン、イラク、イラン、トルコ、イタリア、ギリシャ、エジプトといった国と、それから薄いグレーがG7、世界の所得に占める2つのグループのシェアの変化が記録されている。黒の部分が大きく減少しているのに対して、薄いグレーの部分が大きく拡大していつているということで、南北格差の拡大。

それから、工業化水準に関しても、先進国の工業水準が大きく上がる(図18、P16)。これは日本。それに対して中国、インド、パキスタンというようなA7に属する国の工業化が減少・低下していくということである。そのほかに、図には載っていないが北で都市化が進展したことも大きな変化であったということである。これが第2章で、第3章になると、第二のアンバンドリング、フェーズ4である。

ここでのブレイクスルー、何が第二のアンバンドリングをもたらしたかであるが、ICT革命、それから輸送部門でも航空貨物輸送が発展する。さらには貿易投資の自由化によって貿易コスト、投資コストが低下したということである。ICT革命に関しては、ここにあるように情報保存能力が高まったとか、計算能力が高まったことが示されている。ICT革命が進んだことで複雑なプロセスを遠く離れたところから調整するコストが低下する。その結果として、先ほど話した製造プロセスが国際的に分散していくと、工場が世界に分散されていくと。特に労働集約型の生産工程が先進国では工業化が発展したことによって賃金が上昇する。一方で、途上国ではそれほど賃金が上昇しなかったことで、それが一つの重要なきっかけになって工場が先進国から途上国に移動していくということが起きる。これをオフショアリングと呼んでいる。第二のアンバンドリングがもたらした結果としては、G7諸国の空洞化、そしてオフショアリングの受け入れとなった一部の途上国の工業化が進んでいったと。一部の途上国の工業化に関しては、これは先ほど見てもらった絵と非常に似ているが、1990年以降G7の世界のGDPに占めるシェアが低下しているのに対して、中国、インドのシェアが上昇していると(図23、P16)。それから、G7の世界における製造業のシェアが低下していつているのに対して、中国のシェア、それから韓国、インド、インドネシア、タイ、ポーランド、こういったいわゆるI6と言われる国々のシェアが上昇していったということである(図25、26、P17)。

図27(P18)が大いなる収斂ということであるが、G7のシェアが減少するのに対して、新興11カ国ということで中国、インド、ブラジル、インドネシア等、8ページの下に書い

であるとおりであるが、新興工業国のシェアが上昇していった。ここでの一つのポイントは、すべての途上国がこの恩恵に授かったのではなく、一部の途上国であったということだと思う。それについては後でもう少し議論がある。

図 30 (P18) では、発展途上国において貿易の自由化が 1990 年以降急激に進んだこと。ここでは関税率だと思うが、下がっていったことが分かるかと思う。

それから、次の図 31 (P19) では、投資協定の数が増えたということであるが、投資の自由化が進んだことを表している。途上国の中でも先進国から工場を受け入れるような環境が整備されてきたということである。これが第二のアンバンドリングの議論である。

第Ⅲ部グローバル化のナラティブを拡張するというので、今まで話したことをいろいろな角度から分析していこうというのがこの本の狙いであるので、ここではグローバル化の各フェーズの理論的説明を行うということである。

第Ⅲ部の最初の章である第 4 章では、グローバル化の 3 段階制約論を仕立てて、その制約論に従ってグローバル化を説明していく。最初に話したように、グローバル化の制約となっているのはモノの移動コスト、アイデアの移動コスト、ヒトの移動コストがあるわけであるが、これが順番に低下していったグローバル化が進んでいったということである。

第一のアンバンドリング。モノの輸送コストの大きな削減。生産と消費の分離が可能。これは先ほどから話しているとおりである。ただ、今までのところで話していなかったことで重要なことは、北の国々では産業集積が進み、それが一つの原因となってイノベーションが生まれ、イノベーションが競争力を高め、さらに産業集積を加速化させて、それで北の競争力が高まり、工業化が北にさらに集約される形で進んでいき、その結果所得格差が拡大した。だから、ここで重要なのは、やはり集積とイノベーションが結び付いたことだと思う。グローバル化の第一の加速期のメンタル・モデルという言葉を使っているが、あまりはっきりどういう意味でメンタルかよく分からないが、ここでは理論的な説明をしようとしているが、実はその後に第 6 章でグローバル化の経済学の基礎というのがあり、そこで比較優位の話等が出てくる。繰り返しになるので、そちらのほうで説明したいと思う。

第二のアンバンドリングに関しても、ICT 革命による通信コストの低下が重要である。ここで特に今の 3 ページの上のところ注目される一つのポイントは、第二のアンバンドリングが進んだ結果、ファクトリー・ヨーロッパ、ファクトリー・ノースアメリカ、ファクトリー・アジアということで、必ずしもファクトリーワールドということにはならなかったのではないか。ファクトリー・ヨーロッパの中心地というか拠点はドイツにあり、ファクトリー・ノースアメリカの拠点はアメリカ、ファクトリー・アジアの拠点は日本で、そこから工場が分散されていったということである。繰り返しになるが、1990 年代以降に起きた国際生産の再編成は、それ以前のものとは本質的に性格が異なっている。1990 年代以前においては G7 の国々は国内にノウハウを蓄積し、国内のサプライチェーンを構築して

経済を発展させていった。それに対して 1990 年以降において急速な工業化を進めていった I6 というのは、地域生産ネットワークに加わることで競争力を身に付けたという全く違うパターン、違った形で工業化が進められたというのがここでのポイントだと思う。

では、第 5 章で何が本当に新しいのかということである。一つには、比較優位の無国籍化が挙げられている。オールド・グローバリゼーションの下では、比較優位があり、競争の前線は国境であった。しかし、ニュー・グローバリゼーションの下では、競争は複数の国にまたがる生産ネットワークにあるということで、国境の意味が薄れてきた、あるいはなくなってきたということである。それとも関連するが、オールド・グローバリゼーションの下での貿易は、モノの貿易であり、そのモノの中には輸出国の生産要素、テクノロジー、社会資本等々すべてがパッケージのような形で含まれていた。それに対してニュー・グローバリゼーションの下での貿易は、ある部品の一部というような形で、必ずしもそのものの生産された国で、例えば生産要素とかテクノロジーとかが全部そこに入っているということではない。

あと幾つか面白そうなポイントがあったので書いてきたが、スマイルカーブというのがある（図 46、P19）。第二のアンバンドリングが起きる前のスマイルカーブというのが、この白い丸をつないでいるようなもので、縦軸は付加価値のシェアであるが、生産工程例えば組み立て製造前のサービス、組み立て製造工程、組み立て製造後のサービス、この 3 工程において付加価値のシェアはあまり変わらない。しかし、第二のアンバンドリング後のスマイルカーブは、生産工程の前と後の工程において付加価値が大きく高まって、このスマイルカーブがより深くなるということが起きている。サービスの重要性が増している、あるいは製造業のサービス化が進んでいるということで、サービスは実は第三のアンバンドリングで非常に重要な要素となってくるのだが、経済自体もサービス化が進んできたことがここに示されている。

それから、第二のアンバンドリングと第一のアンバンドリングで、その勝者と敗者ということで、利益を得たヒトと損失をこうむったヒトが違う形で出てくるのでないかと。第一のアンバンドリング、オールド・グローバリゼーションの下では、豊かな国の高技能労働者が利益を得、豊かな国の低技能労働者は損失をこうむるわけである。ニュー・グローバリゼーションでは、豊かな国の高技能労働者が勝つ、豊かな国の低技能労働者が負けるというのは同じであるが、実は発展途上国のほうで何が起きたかをここで示している。つまり発展途上国では先進国から工場を誘致したことで、そこで働く人たちの所得が上がったわけである。だから、途上国の未熟練労働者、低技能労働者と言ってもよいのかもしれないが、そういった人たちの生産性あるいは所得が上がる。その結果、エレファントカーブというのがある（図 48、P20）、ブランコ・ミラノヴィッチと言う人が描いた絵であるが、象を横から見た形になっている。これは世界の人々を全部一つの国のようにまとめて、彼らの所得がどのくらい変化したかを示している。一番金持ちは先進国の高所得者層だと思うが、そこの所得が大きく伸びた。それから、真ん中辺の象の背中ぐらいに当たる人たち

の所得も大きく伸びた。これは途上国の中所得者層と言ってよいかと思うが、工場で働いていたりするヒトだと思う。所得が全然増えていないのは、上のほうの 80 とか 90 ぐらいに書いてあるところであるが、それは先進国の低技能労働者の人たち、アメリカで言えばきっとラストベルトで働いている人たちの所得の伸びが低い。なぜ先進国の低技能労働者あるいは中技能労働者が被害を受けたかと言えば、オフショアリングである。

ただ、4 ページの上のところ、「低技能労働者の職は安定」と書いてあるが、これは先進国で、別に差別的な言葉で言うつもりはないが、掃除をする人とか、そのような人たちの職は別に奪われていないので、そこは安定しているということである。だから、職が途上国に移ってしまった人たちというのは中技能労働者である。第二のアンバンドリングによって起きているグローバリゼーションは、それ以前のグローバリゼーションと比べて荒々しくなるのは、変化がまず激しいこともあるし、職が先進国から途上国に移ってってしまうという意味でも激しいということである。今後どうなるのかは非常に予想が難しいと書いてある。

第Ⅲ部に入って、グローバリゼーションの変化を読み解くということであるが、特に経済学の観点から第一のアンバンドリングと第二のアンバンドリングをどう説明したらよいのかということでは幾つかの分析が行われている。

第 6 章では、グローバリゼーションの経済学の基礎で、経済学で使われる用語がここでは 4 つないしは 5 つ書かれているが、1 つはリカードの比較優位の理論。2 番目は新経済地理学、3 番目が内生的経済成長理論、4 番目に情報通信技術に関する理論だと思う。比較優位の理論の説明は必要ないと思うが、交換の利益、生産特化による利益、規模の経済が含まれることもあるかと思う。比較優位の下でのグローバリゼーションの功罪というか対立軸があり、消費者は利益を得るが、生産者の一部は損失を被る。また、熟練労働者対未熟練労働者というような形で対立も起きるということである。そういうグローバリゼーションの功罪を認識するならば、グローバリゼーションにおいて痛みのない利益はないということが書かれている。このジレンマを解決するにはすべての市民が恩恵と痛みを分かち合うようにする「社会契約」を作り上げなければいけない。まさに今我々が直面している問題というのは、あるいはアメリカが直面している問題というのは、こういうところなのかなという気がする。

それから、新経済地理学、ここでは空間の発展が不均等に進むことの説明で、具体的には企業による立地の決定に関する議論である。重要な要素として分散力と集積力のバランスによって企業の立地が決まってくる。分散力は 1 カ所に経済活動が集中することによって発生するコスト、都市部の渋滞とか高いオフィスの賃料など、これが分散力である。一方、集積力は、経済活動が 1 点に集中することによって得られる利益、情報が手に入りやすいとか人材が手に入りやすいといったような利益、その分散力と集積力のバランスによって企業の立地が行われるということである。

それから、内生的成長理論に関しては、特に知識あるいはイノベーションの経済成長に

における重要性ということで、知識のスピルオーバーによって、極端な議論をすれば経済成長が永遠に続くようなこともあり得る。

それから、細分化の話がある。これは一つの一貫工場が分解されて、各国にその工場の工程の一部が移転するという話をしたわけであるが、ここでは細分化ということで議論されている。ここでそうなのかなと思ったのは、ICT は **Information and Communication Technology** であるが、通信技術と組織技術を分けて考えるべきだろうという話をしている。CT (**Communication Technology**) は調整技術と訳されていたが、その調整コストを引き下げるということで海外に工程を分散しても調整コストが下がるので効率的な生産が行える。だから CT が下がると工場は分散していく傾向が強まるということである。一方、IT は **Information and Technology** 情報技術。情報技術が進むと、分散しなくてもいろいろな工程を 1 カ所で全部行うようなことも可能だろうということで、IT に着目すると実は工場の分散あるいは工程の分散というよりは、工程が 1 カ所にまとまるような方向の力が働くのではないか。ICT も分けて考えると経済に、あるいは生産工程に及ぼす影響も違ってくるだろうと、そのような議論がされている。

オフショアリングについては、先ほど話したが、特に生産コストが低い地域にその生産工程を配置するようなことが行われることである。

第 7 章、グローバル化のインパクト、その変化を解き明かすということで、ここもかなり今までの議論の繰り返しになるが、第一のアンバンドリングにおいては、北は工業化し、南は空洞化、具体的には北は工業化し、所得も上がり、所得が上がると市場規模も拡大し、産業立地の魅力も上昇すると工業化は加速して、そこにまた知識のスピルオーバーなどが重なって、北が急速な工業化に成功する。南は停滞するという意味で大きな分岐が起きた。第二のアンバンドリングでは、逆に北が空洞化する一方で、一握りの途上国が工業化した。これは発展途上国のほうで知識のスピルオーバーなどが作用したということである。

あと今のところでコモディティ・スーパーサイクルが生まれて、途上国の所得が上がり、そのことによって例えば食料品に対する需要などが上がる、あるいは資源・燃料に対する需要が上がるということで一次産品産出国の経済が急速に拡大したということも、この第二のアンバンドリングの一つの影響ではないか。小麦から原油まで商品価格がつけ上げられた。だから、第二のアンバンドリングの結果、必ずしも工業化に成功した国だけではなく、資源、燃料などを輸出していた途上国も経済成長を実現させたということである。その結果、大いなる収れんが起きた。貿易に関しては第一のアンバンドリングのときは、北と北の貿易、工業国間、先進国間での貿易が拡大したのに対して、第二のアンバンドリングの下では北と南、先進国と途上国の貿易が相互に上昇したということである。

これも繰り返しになるが、では、発展途上国がすべてこの恩恵に授かったのかということとそうではなく、北の国から遠く離れた途上国とか、あるいは生産ネットワークに加わる必要条件を満たしていなかったような国、つまり海外からの企業を受け入れる環境が整って

いない、あるいはモノの貿易がスムーズに行われぬ、このような国では第二のアンバンドリングの下でのメリットはなかったということである。

第IV部、なぜニュー・グローバリゼーション、第二のアンバンドリングが重要なのかということ、ここでは政策の議論をする。

第8章でG7、北の工業国におけるグローバリゼーション政策、それから第9章で途上国におけるグローバリゼーション開発政策を考えてみようということである。なぜこういう章を設けたかという、繰り返しになるが、従来はある部門を発展させるという議論をしていたわけであるが、第二のアンバンドリングが進んだ状況ではグローバル・バリューチェーンのどこを発展させるかという議論、どこの生産工程を発展させるかという視点から議論が進められなければならなくなったということである。

これは第一のアンバンドリングのときであるが、G7とA6、A6は先ほど言ったように古代文明の国であるが、その国々の世界の人口に占めるシェア、それから世界のGDPに占めるシェアの変化である(図54、P20)。先進7カ国の世界GDPに占めるシェアが急上昇しているが、人口に関してはほぼ一定、15~16%だろうか。もう一方で、古代文明の国々の人口のシェアも減少しているが、世界のGDPに占めるシェアも大きく下がっているということで、これは大きな分岐があったことの説明である。

第8章、G7のグローバリゼーション政策を考える上で重要な要素を挙げてみたのが図55(P21)である。政策のターゲットとして、粘着性と潜在的なスピルオーバー、この2つの軸を意識しながら考えるのがよい。例えば社会資本とか、高技能労働力、基礎科学、これが正のスピルオーバーがあると思われるものである。それに対して、国際移動性という観点から言うと、基礎科学あるいは高技術労働力というのは比較的国際移動性が高い。もう一方で社会資本はほとんど国境を移動しない。だから、国レベルでの政策を考える際には、粘着性の強い部分、あるいは人材とか社会資本とか、そういう粘着性が強いものと、それから強いスピルオーバー、こういった要素を養成・育成するのが先進国としては望ましいのではないかという議論である。具体的には、人材で言えば科学者やエンジニア等を育てることが重要である。人的資本の育成、養成である。粘着性の弱い要素というのは、育てても海外に行ってしまう可能性も高いわけで、その国にとってみれば投資だけの成果を享受することはできない。世界レベルで考えれば別にそういう問題はないと思うが、国レベルで考えるとそういうことが重要になってくるかなということである。

次に、貿易政策であるが、第一のアンバンドリングのときには、ある国の企業が海外に輸出できるような支援をすることが国の政策として考えられたわけであるが、第二のアンバンドリングの状況の下では、グローバル・バリューチェーンがうまく構築できるようにするのが国にとっての政策であろう。具体的には「二種類の規律」と書いてあるが、海外でビジネスをしやすい環境を作る。これは望ましい投資環境を作るということで、例えば投資協定を結ぶとかというのがあると思う。投資環境を改善するというのが1つ、それから2番目が自由な貿易が行われる環境を作るということで、国際生産施設が一つにつなが

った状態を維持する措置。こういった2つの規律を実現させるような枠組みとしてTPPのような深い貿易協定が必要だろうという議論をしている。これが先進地域における発展戦略あるいは貿易政策である。

第9章では、開発政策を見直すということで、開発理論の簡単なレビューをしている。開発理論、特に第一のアンバンドリングの下では、輸入代替工業化政策、これを第一の波と呼んでいるが、いわゆるビッグプッシュを必要とする、輸入代替工業化である工業部門の例えば自動車部門を発展させるための政策として輸入代替工業化政策が考えられ、実施されてきたわけである。それに取って代わるのがワシントン・コンセンサスで、政府の介入を最小にすると、自由市場重視という政策が取られたわけである。ただ、第二のアンバンドリングの下では、こういったある産業を育成するというような考え方は、先ほども言ったように当てはまらないと、ビッグ・アイデアを追い求めることは諦める、そういう意味で「降伏」と書いてあるが、今までのような発展戦略を構築する、考案するようなことはもう諦めたほうがよいだろうということである。今までの発展戦略は、いわゆる経済発展段階説にのっとって非耐久消費財から始まって中間財、耐久消費財、生産財、経済発展を実現させていくということで、この本でも書かれているが、左の絵のような雁行形態論(図61、P21)が、今までの第一のアンバンドリングのときの正しい考え方であった。しかし、今はそうではなくて、彼の言葉ではムクドリと、何かよく分からないが、右のように、きれいに隊列を組んで飛ぶというよりは、いろいろな形で鳥が飛んでいる。スモール・ナッジとか呼んでいて、ナッジとは押すようなことであるが少し押すような形で工業化を実現させることができる。だからかなり第一のアンバンドリングの下での工業化政策と第二のアンバンドリングの下での工業化政策は違うだろう。

実際の例として自動車産業に関してタイとマレーシアのケースを比較している(図57、P22)。上が生産、下が輸出額で、タイは海外の生産工程を呼び込んできたということでの成功例、マレーシアは自国で自前の自動車産業を育成しようとして失敗した例である。輸出の比較を見ると明らかであるが、タイは自動車輸出が大きく拡大しているのに対して、マレーシアからはほとんど輸出は伸びていない。だから、発展途上国の発展戦略としてやはりいかにグローバル・バリューチェーンの一部を取り込むかが重要だろう。

では、どういうバリューチェーンに参加すべきなのか、あるいはどのようにしてバリューチェーンに参加できるのか、あるいは参加した後拡大していくのか、それが最終的には持続的経済発展に結び付くのかといったような観点から彼の考えが幾つか書かれている。例えばバリューチェーンに関しては、少なくとも2つのパターンがあり、生産者主導型のバリューチェーンと買い手主導型のバリューチェーンがある。工業化という意味では、生産押し上げ効果という意味では、生産者主導型のバリューチェーンのほうが優位にあるとか、バリューチェーンを呼び込むに当たっては、一つにはやはり地理的な要素も考えなければいけないだろう。それから、グローバル・バリューチェーンにどのようにしたら参加できるのか、どのようにしたら取り込むことができるのかということであるが、これは投

資をどのようにしたら呼び込めるかということで、参入を促すようなビジネス環境を整備する。先ほどもあったように知的財産権の保護を提供するとかということがあるだろう。それから、貿易に関しては、モノ、ヒト、カネの移動が国際間で自由にできるような環境を整えるということである。

それから、拡大の問題ということで議論されていたのが、前方連関、後方連関ということで、工程を呼び込んだときに、あと発展していく可能性としては、前方連関あるいは後方連関が非常に深く結び付いている。そういったような工程を呼び込むことができれば拡大につながるだろうということだったと思う。

それから、持続的な経済発展実現へ向けてというところでは、少し議論が飛ぶような感じもするが、一部の工程だけを呼び込んでも、それは経済発展にはならないだろうと。経済発展というのは社会、ここでは政治も一応言っているが、そういう面での経済発展あるいは社会の発展が重要であって、その目標を実現させるにはインフラを整備するとか、公平な分配を可能にするような制度を作るとか、今までの議論とは違う議論がここでは行われていたと思う。

最後の第IV部であるが、未来を見据えるということで、今後どうなるのかということである。

第10章でグローバリゼーションの未来を考える。先ほどからモノの移動を抑制することと、情報の移動を制限する2つの制約があり、もう一つの制約はヒトの移動に関する制約。第一と第二の制約というのはかなり解消された。第三の制約、ヒトの移動に関してはまだかなり制約がきついのではないかとということである。ただ、そうは言っても、第一の制約、第二の制約についても、7ページの下のところであるが、貿易コストはずっと下がってきたが、つい最近の動きを見ていると保護主義的な動きも改めて大きくなってきている可能性もあるので、貿易コストがこのまま継続的に下がっていくと仮定してよいのかどうか分からない。ポールドウィンのところではそういう話はない。つまりポールドウィンが書いたときには多分ランプがまだ大統領になっていなくて、保護主義的な動きはそれほどなかった。彼は、ここでは保護主義的な動きは起きないのではないかと書いてある。

それから、2番目の制約、情報を移動させるに当たっての制約である通信コストは継続的に下がっていくだろうと書かれている。ICT革命については、先ほど言ったようにICとITのどちらが強くなるかによって生産工程の分散に関しては異なった影響が出てくるのではないかと。あとは対面コストである。これはヒトの移動に関するコストで、ICTの発達によって継続的に低下していくだろう。人間の分身がヒトの集まる会議に出席するようになるのではないかと。テレプレゼンス、ホログラフィック・テレプレゼンス、立体画像の移動とか、テレロボティクス、人間と機械との相互作用、あるいはそれプラス自動翻訳の急速な進化などによってあたかもヒトが国境を移動するような状況がもう既に生まれているかもしれないし、急速に発展するのではないかと。そうなると状況は大きく変わるだろう。そういうことが起きなければ、今とあまり変わらないのではないかとということを書いていたと

思う。

あとは、アンバンドリングに関して言うと、生産のアンバンドリングはこれからも続く。新しい動きとして、マスカスタマイゼーションだとか、3Dプリンティングなどが起きれば、これはアンバンドリングしなくても、要するに情報を機械で送ってしまうわけであるので、海外に工場を分散して持っていく必要もなくなることも起きるかもしれない。将来どういふことが起きる可能性があるかをリストアップしている感じである。第二のアンバンドリングに関して言えば、アフリカの東海岸のほうにも広がっていくのではないかとか、そのような予測もしている。

それから、第三のアンバンドリングに戻るが、私も必ずしも納得していないが、第三のアンバンドリングに下線が引いてあり、労働サービスを労働者から物理的に切り離す。テレプレゼンス、テレロボティクス、自動翻訳機などによって発展途上国の低技能労働者、例えば清掃員や警備員が豊かな国にテレコミュートできると書いてあるが、私はそうは思わない。そういうヒトは来ないで機械が全部やるようになると思う。一方で、豊かな国の高技能労働者、例えば技術者とか医者とか法律家は途上国にテレコミュートすると思う。だから、豊かな国、北の国の先進国の高技能労働者に対する需要はどんどん上がって行って、そういう人たちの所得も上がっていく。これが第三のアンバンドリングの一つの可能性かと思う。

また、今日のグローバリゼーションは、読者の親の世代のグローバリゼーションとは大きく違う。明日のグローバリゼーションは今日のグローバリゼーションともかなり違うのではないか。今後はバーチャルプレゼンス革命が引き金になって、テレプレゼンスとテレロボティクスのコストが下がり、最大の原動力になる。

最後のところで、この表（付録図2、P22）は実は慶應の木村氏とこういう研究を結構やっていて、最初は彼がほとんど作って、その後私が修正した表であるが、これが今までの議論のまとめかなと思う。グローバリゼーション以前の段階ではバンドリングという状況があり、そこでは貿易コスト、コミュニケーションコスト、フェイス・トゥ・フェイスコストも全部高い、だから何も移動しない、自給自足、これが1820年ごろまで。それから、第一のアンバンドリングでオールド・グローバリゼーションが進んだ理由として貿易コストが下がった。ほかのコストはまだ高いままである。ブレークスルーになったのは蒸気機関の発達。距離を克服して動いたのはモノ。国際分業は産業単位で、この状況が優勢な時期は1820年～1990年。世界の所得分布は豊かな国々の工業発展が拡大。南の国は以前のままだということで大いなる分岐。国内格差については、先進国では拡大して途上国で縮小したと書いたのは、これはよくあるが、例えばアジアの国などを見て、途上国は労働集約財を輸出するわけである。労働集約財を輸出するということは単純労働集約財、熟練労働集約財と分ければ、単純労働集約財を輸出するわけで、その単純労働に対する需要が上がるので、単純労働の賃金が上がる。その結果として所得格差が縮小するというのが第一のアンバンドリングあるいはオールド・グローバリゼーションが途上国で起こったことだ

と思う。それに対して第二のアンバンドリング、ニュー・グローバル化の下では、途上国においても海外から企業が進出してきたことによって、例えば新たな技術を導入すると、その技術を使えるような人、高技能者の人たちの所得が上がっていくということで第二のアンバンドリングのときには先進国でも途上国でも所得格差は拡大したのではないかと思うので、それを書いた。

第二のアンバンドリングをもう少し丁寧に説明すると、貿易コスト、コミュニケーションコスト両方が下がる。フェイス・トゥ・フェイスコストは高いまま、ICT 革命がコミュニケーションコストを低下させ、アイデアが国境を動くようになった。ここでの国際分業は工程単位で議論されるようになった。世界の所得分布は、この本のタイトルにあるように大いなる収斂ということで所得格差は縮小した。未来のグローバル化、第三のアンバンドリングであるが、貿易、コミュニケーション、フェイス・トゥ・フェイス、3つのコストが下がる。ブレークスルーとしては新たな、さらなる ICT 革命、国境を越えて移動するものはヒト。国際分業はヒト単位で議論されるようになるのではないか。そこから先はあまり書いていないが、先ほど言ったように、そういった状況が生まれれば、やはり高技能を持っている人に対する需要は格段に上昇して彼らの所得が大きく伸びる。その結果、所得格差は広がるのではないか。

話を少し違った視点からの議論に移すならば、そういった所得格差の拡大が起きることによって社会の安定とか政治の安定にはどういう影響が出るかも考えなければいけないのではないかということである。予定より少し時間が延びてしまった。以上で寺西ゼミでの報告は終了する（笑）。